かささぎ 通信 第34号

2015年5月8日　発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　　「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年四月の「森三郎の作品を読む会」は、森三郎さんのご長女・保澤やす子さんを囲んで、森三郎さんのお話をお聞きしました。

「森三郎の作品を読む会」は二〇一二年七月に第一回の会を開きました。早くも三年近くがたちます。

「赤い鳥」に掲載された作品を掲載順に読んできましたが、掲載作品一一九編のうち、これまでに約半数を読みました。もっと作品を理解するためにという観点で、今回、やす子さんからお話をお聞きすることができました。

やす子さんは静かな口調で興味深いお話をお聞かせくださいました。その中のいくつかについて紹介します。

（一）歌について

やす子さんの話

父はとても歌が好きな人で、『赤い鳥』の童謡、北原白秋先生の詩にメロディーが付いたものはよく歌っていました。万燈祭りの日には夜更かしになるので、子どもたちに昼寝をさせたいと父は思ったのでしょう、そんな時、必ず歌う歌がありました。白秋先生の「祭の笛」に自分で曲を付けたものです。

やす子さんは会員の頼みに応じてその歌の一節を歌ってくださいました。

「祭の笛」の第一連はこんな詩です。

祭りの笛

祭りの笛が鳴りまする。
今年も蚕豆（そらまめ）もぎりましょ。
祭りの笛が鳴るころは
蛍もつけます、赤の襟（えり）。

また、お孫さんが生まれた時には「ねんねんねっ小島のやぐら乙女」という子守唄を歌って、寝かしつけてくれたそうです。

そうかと思うと、子どもには分からないような、歌劇「リゴレット」の中の、「女心の歌」（風の中の羽のように）を、イタリア語で歌ったりもしたそうです。

（二）楽器について

森三郎さんは上京して「川上児童楽劇団」に入った時、高階哲夫さん（「時計台の鐘」の作詞・作曲者）からピアノを教わっていたが、指が届かず、途中でヴァイオリンに転向したということもお聞きしました。「目ぐすり」に出てくる七衛門さんと、竹やぶから聞こえる三味線の音色をイメージして、森三郎さん像を描いていると、少し印象が違います。

（三）父と娘

お父さんの森三郎さんから、小さい時から中学生になるくらいまで、毎晩お話を読んでもらっていたこと、また、お父さんの三郎さんと一緒に「大黒座」で洋画を観たこと、三郎さんは特に「ぼくの伯父さん」（一九五八年）が大好きだったことなど、やす子さんのお話は、遠い過去を思い起こすというよりは、まるでつい昨日のことのようにはっきりとした語り口でした。

この話の詳しいことは、今年の冬に発行予定の「森三郎の作品を読む会」会誌「かささぎ」2号で紹介したいと思っています。

第三回「森三郎に親しむ集い」が近づきました！

5月17日（日）午後1時半～3時半　刈谷市中央図書館

※今回は「森三郎の作品を読む会」からも報告をする予定です。

○　次回予定　6月12日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和8年10月号初出作品

「ハーモニカ」・「杉でつぼう」・「ステッキえんぴつ」